図239　遺跡の位置　1,荒木前遺跡　2,中の山遺跡　3,貝塚遺跡　5万分1地形図「新潟」

荒木前遺跡　江南区城所一丁目

亀田砂丘の西端部に立地する平安時代と中世が中心で、縄文時代中期・後期、古墳時代、奈良時代の遺物も少量認められる遺跡である。城所の鎮守である熊野神社の裏手（南側）の、緩やかな砂丘西斜面一帯が遺跡と推定されている。標高は、最も高い熊野神社でおおよそ二・七メートルである。西斜面と沖積面との境には、亀田排水路が通っている。この水路は、横越方面から流れ下り、栗ノ木川に合流する河川であったが、今は緑道化されている。沖積面には、この川に由来する自然堤防が点在している。

平成元（一九八九）年、宅地造成の事前調査で、亀田町教育委員会が神社の西側隣接地約二〇〇〇平方メートルを発掘調査し、平成六年に約四〇〇〇平方メートルを発掘調査した。調査では、平安時代と中世の遺構・遺物が多く見つかった。

図240　熊野神社

中世の遺構は、掘立柱建物跡が一〇棟、井戸が一一基のほか、空堀と推定された溝が一条、畑の畝の跡と見られる小溝などがあった。遺物は、日常雑器である素焼き陶器（珠洲焼・越前焼）の擂鉢・甕・壺が最も多く、施釉陶器（瀬戸美濃焼）の天目茶碗・丸碗・徳利や、青磁・

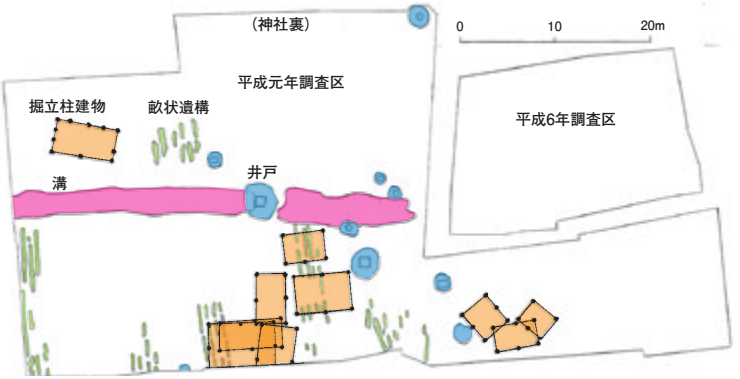

図241　中世の遺構配置　『荒木前遺跡』『荒木前遺跡Ⅱ』から作成

白磁・染付（中国産磁器）の皿・碗類のほか、瓦質土器で作られた香炉も出土した。石製品では砥石のほか、石臼や五輪塔の一部（水輪）があり、銭貨も出土した。これらの遺物の年代は十三～十六世紀である。

遺跡周辺には、十四世紀に城所の手代山に北条家が柵を構え、十六世紀には上杉家の武将荒木氏が日水を居城とし、熊野神社は荒木氏の霊を祭る社であったという伝承が伝えられている。この伝承と、周辺が中世遺跡の密集地であることから、平成元年の調査では、遺跡は在地領主層の遺跡と考えられた。また、平成六年の調査では、本遺跡と中の山遺跡・貝塚遺跡は、遺跡の広がりから見て同一遺跡であるという見解が出された。中の山遺跡では、運河的機能を持つと推定される溝が発見されており、流通都市的な要素があると指摘されている。これらのことから、中世の荒木前遺跡は、在地領主層や諸商人など、様々な人が居住した大遺跡の一画であると思われる。